

# 津輕藩の牢屋について

黒 滝 十二郎

## 一 はじめに

江戸時代の牢屋は原則として未決拘置所の事を意味するのであって刑の執行場ではないといわれている。幕藩体制下において、津輕藩に於いても当然それがあてはまるわけである。

津輕藩の牢屋については、まとまった根本的な史料が存在せず、その実態を究明するのは非常に困難である。そこで主として「津輕藩日記」(弘前市立図書館に所蔵されている)に記載されている断片的な記録をあつめて分析し、そこから実態を把握しようとしても自ら限界があるわけである。従って「津輕藩日記」の分析を通じて津輕藩に於ける牢屋の大雑把な概要という意味で述べて見たい。

## 二 牢屋の所在地

津輕藩が領国支配の中心として高岡(寛永五年に弘前と改称)の地に築城を本格的に開始したのは二代藩主の津輕信枚(のぶむら)(牧)の時で、慶長十五年(一六一〇)の事といわれている。

それ以後城下町が次第に形成されて行ったのであるが、なんといっ

ても寛永期以前、所謂津輕藩初期の根本史料の欠如から城下の町絵図が現存しないので所在地を確認出来ない。しかし元和三年(一六一七)にキリシタン六名が牢屋から出されて火刑になっているので牢屋の存在だけは推測出来るのである。<sup>(1)</sup>

現在伝えられている最古の絵図といわれる寛永末年頃の「津輕弘前城之絵図」には牢屋が見当らず、<sup>(2)</sup>慶安二年(一六四九)頃の「弘前町絵図」には弘前城下の北端(現在の馬喰町)に「籠屋敷」と見えるのでこの絵図は所在地を確認出来る最古の史料ともいえるわけである。<sup>(3)</sup>従ってそれ以前に牢屋は存在したのであるが、慶安二年段階までには牢屋の所在地が定まっていた事が知られるわけであり、以後江戸時代を通して移転する事はなかったのである。

注 (1) 浦川和三郎氏『東北キリシタン史』三七四―三七八頁。

注 (2) 『弘前市史』(藩政編)巻末年表では元和二年となっている。

注 (3) 櫛引忠蔵氏蔵。弘前市立図書館にはその写真版が所蔵されている

注 (3) 弘前市立図書館蔵

### 三 牢屋の種類と収容人員

幕府の牢屋には五種類あつて大牢（庶民収容）、二間牢（庶民収容）

揚屋（御目見以下の直参・陪臣・僧侶・医師・山伏などを収容）、揚座敷（御目見以上の直参およびこれに準ずべき僧正・院家・紫衣そのほか重き僧侶・神主らを収容）、百姓牢である。<sup>(1)</sup>

津輕藩では大牢、中牢、女牢、揚屋の四種類であり、全国の各藩でも幕府の牢屋と一様ではなくそれぞれ違つていたようである。<sup>(2)</sup>

まず大牢、中牢については、

「延享二年二月廿日

一 昨十九日夜九過牢屋出火大牢・中牢・二軒共焼失咎人九人焼失三人引出之」<sup>(3)</sup>

とあつて、それぞれ一棟ずつあつた事がわかる。

女牢については、天明三年（一七八三）六月十三日に、

「一 牢奉行申立候此度牢屋御取建被仰付候処女牢江茂入置候様仕度奉存候然處女壹人罷有候ニ付置所如何可被仰付哉之旨申出之  
仮牢御取建にてハ臨時御物入ニ付牢守共居宅之内老坪作事方御有合木柄を以取囲入置（以下略）」<sup>(4)</sup>

と見える。これは牢屋を新しく建てなおすにあたり、未決囚等を収容するのに女牢を利用する。但し女牢に入っている女一人は牢守の屋敷の中に仮の牢屋を作つて収容せよという内容である。女牢が最初に設置された時期は不明であるが、この頃には独立した女牢が存在した事を示すものである。

寛政十二年（一八〇〇）十二月五日に、

「一 町奉行申出候牢屋御取建之處三牢之内大牢壹ヶ所此節出来候間（以下略）」<sup>(6)</sup>

とある。揚屋は文化二年に初めて設置されているのであるから、この「三牢」というのは大牢・中牢・女牢の総称と推測される。

これらの牢屋には主として農民町人等が収容され、その他に下級武士も含まれていた事が「藩日記」に「入牢」とか「牢舎」という表現で多数見られるのでわかるが、それはどの牢屋を指すのか、更に三牢の規模がそれぞれの程度なのか（次にのべる収容人員から或る程度わかるが）、大牢、中牢には未決囚の容疑等に軽重の差があるために区別して収容したものなのか等不明な点が多いのである。

揚屋について述べると、文化元年（一八〇四）八月二十一日に

「一 四奉行申出候町在九浦之者共為若罪狀ニ無之者共御詮議方相極り不申内町預村預致置候処永々ニ相成候而者難儀に付入牢等被仰付実ニ罪ニ無之者御免之上出牢被仰付候得共左候而者其者面皮を失ひ候鉢ニ付今度格段之以御仁惠揚り屋御取建之儀四奉行沙汰可申上旨御演説を以被仰付候（中略）巨細ニ穿鑿不仕候而者容易ニ沙汰仕難申上奉存候依之私共ニ而与得穿鑿之上追々可申上候間今暫御取延被仰付度旨申出之通被仰付旨申遣之」<sup>(8)</sup>

とある。

右によれば、何かの軽い容疑で長期間町預りや村預りにすると町や村の重い負担となり、それを軽減するために入牢とし、その後取り調べの結果無罪放免となれば、その人達はまわりから冷い眼で見られるであろうから牢屋とは異なる収容施設として「揚屋」を設置したい。

その為に今後いろいろと計画したいというのである。

翌年（一八〇五）三月十日に、

「一四奉行申出候此度牢舎之外ニ揚屋御取建被仰付入牢ニ不相成罪状之者并町預村預に可相成者共入置候ハハ下々為方ニも可相成候哉沙汰可仕申上旨御演説を以被仰付与得沙汰仕候処是迄迎も重キ罪状之者又者無宿難之者其者ニ寄入牢伺之上被仰付罷有其外町預村預被仰付罷有候得共御詮議方之筋ニ寄永々町預村預被仰付候而者町在及難儀候趣粗相聞得罷有候隨而揚屋御取建被仰付輕キ罪状之者入置候様被仰付候ハハ町在為方ニも相成難有可奉存候間揚屋御取建被仰付候様左候ハハ馬喰町之内江御取建被仰付候様尤右取扱之仕組者追々可申上与奉存候則揚屋畧圖差上旨申出之通申付書付ニ而申遣之」<sup>(9)</sup>

とあつて計画案が出来、馬喰町にある牢屋敷の一郭に設置するという申出が許可されている。かくてその後約七カ月を経過して同年十月に揚屋が完成している。

幕府の揚屋は御目見以下の直参・陪臣・僧侶・医師・山伏などを収容の対象としているが、津輕藩に於いて最初は農民町人等で（武士を含めて）容疑のはつきりしない者や軽い罪の者を収容の対象としている事が多数の判例からもわかる。しかしその後収容の対象に変化が見られるので更に五の項で後述したい。又、刑法典の本格的編纂は「寛政律」（寛政九年）それが改訂増補されて「文化律」（文化七年）となつて結実するが、文化二年に揚屋が完成したのは津輕藩における司法制度が整備されて行く過程としてとらえる事も出来ると思われる。その他に四尺牢と仮牢という名称が「藩日記」等に散見されるので

ふれておきたい。

四尺牢は気が狂つたりなどしているために普通の者達と一緒に入牢に出来ない者の収容施設で牢屋敷の中にあつたものであらうと思われる。特殊なものであらうか、よくわからない。<sup>(11)</sup>

仮牢は前述の天明三年六月十三日の史料及び寛政十二年十二月五日の史料（前述の史料の省略部分にあり）から、三牢を新築、改築、修理等の普請中に於ける臨時の収容施設を指したものと思われる。江戸にある幕府の評定所、町奉行所、勘定奉行所などに置かれた「仮牢」<sup>(12)</sup>とは全く異なるものである。

次に三牢と揚屋の収容人員について述べる。

大牢は天明三年（一七八三）七月二十九日に、

「一町奉行申出候青森表より囚人四拾人引上入牢被仰付候然處先達而より牢屋御普請被仰付此節大牢壹ヶ所出来仕是迄拾八人入牢に付右大牢江押合今拾人迄ハ入可申候得共其餘ハ入兼候段牢奉行申出候間四拾人之内拾人入牢被仰付三拾人ハ町預ニも可被仰付候哉左候ハハ牢賄同様ニ被仰付度奉存候尤入牢ニ相究候者永々町預ニ仕人足斗之番人ニ而者メ合ニも相成申間敷様ニ奉存候間壹ヶ所江晝夜四人宛御長柄御持鍵之内より成共番人被仰付度旨申出之（以下略）」<sup>(13)</sup>

と見える。右の史料から大牢へ収容中の十八名に、同年七月二十日におこつた青森騒動の主謀者四十名のうち十名が更に収容されており合計二十八名である。従つて大牢の収容限度は三十名程度となる。

中牢は同年九月五日によれば、

「一町奉行申出候中牢出来に付町預之者三十六人之内廿六人入牢之儀伺之通被仰付候残十人置所之儀紺屋町新町二ヶ所<sup>15</sup>五五人宛差置候様番人之儀者不寝番御座候に付夜半代りニ仕壹ヶ所<sup>15</sup>六人宛十二人被仰付夜廻り二人宛相勤余り人数之儀者向々江相返候様仕度伺申出之(以下略)」<sup>15</sup>

右の三十六名は前述の大牢に収容出来なかつた三十名と関係があるかどうかかわからないが、中牢の収容限度は二十六名である。かくて大牢と中牢は同程度の規模でありほとんど人数の差がなかったと思われる。

女牢については収容限度を示す史料がなく不明である。

「藩日記」には藩主等の相続や法要に際して大赦を実施している記録が多数見られるがその者達は入牢者か揚屋入りの者か、或は町預りや村預りなのか確認出来ない場合がほとんどである。しかし、幕末の嘉永六年(一八五三)十二月十三日上仙院殿(第九代藩主寧親公)

二十一回忌の大赦に關しての記事があり、御留守居支配の三上清吾以下二十四名の入牢者を数える事が出来るが、それは大牢と中牢に入っている者の合計数が大牢と中牢のうちどちらか一方の数であるのか不明である。牢屋は火災や老朽化によつて修理されたり再建されたりしている事が「藩日記」に散見され、収容能力は増大したかも知れないが牢屋敷の所在地は江戸時代を通じてかわらず、しかも文化二年以降には揚屋が牢屋敷の一郭に建てられているのであるから大牢と中牢の収容限度はそれぞれ三十名程度と見てよいのではなからうか。

揚屋の収容人員について確認出来る記録は前述の牢屋よりも更に少

く、同じく嘉永六年十二月十三日の記事で横山龍治以下四十二名を数える事が出来る。<sup>17</sup>これだけから判断するのは危険であるが収容限度が四十名程度なのであろうか。

幕府の牢屋の収容人員は、大牢は九十人、二間牢も八、九十人、揚屋は三、四十人、少ないときで二十四、五人、女牢は多いときで三十人ぐらい。東西の牢を合わせて四百人ぐらいで、少ないときで三百人ぐらいであるといわれるから津輕藩の百名を少し越す程度の人員とでは規模にかなりの差があつた事が知られる。

注 (1) 笹間良彦氏『江戸幕府役職集成』二〇五〜二〇六頁

松平太郎氏『江戸時代制度の研究』(復刻版)五三六頁

石井良助氏『江戸の刑罰』(中公新書)一〇二〜一〇四頁

注 (2) 井上和夫氏『諸藩の刑罰』三一二頁

注 (3) 弘前市立図書館蔵「御用格」第十三(寛政本)・印は筆者による。

注 (4) 弘前市立図書館蔵「藩日記」第三二一・印は筆者による。

注 (5) 「同右」第二二一。「同右」第二四二七にあるが(6)の省略部分である。

注 (6) 「同右」第二四二七

注 (7) 「藩日記」に見られる判例から枚挙にいとまがない。

注 (8) 「藩日記」第二四七二

注 (9) 「同右」第二四八〇

注 (10) 「同右」第二四八九

注(1) 「一 町奉行申出候

富野村

長七

(安永八年)  
右之者去ル<sup>ル</sup>亥年馬盗人次五右衛門与申者同類ニ付入牢被仰付御食議相濟去々<sup>(安永九年)</sup>年片付之儀申上置候者ニ御座候処日頃病氣之処乱心ニ罷成同牢之者与一所に差置候而者取扱も成兼殊にメ方とも不宜候旨申出候間四尺牢之内江當分入替申付置候旨申出之達(以下略)

天明二年七月十八日

「藩日記」第二二〇〇

「一 於牢前御徒目付申渡之寛

金木組嘉瀬村與太郎養子

彌市

我儀氣分不宜一間所江入置候所昨年十一月九日一間所押破出親與太郎を真木割を以打擲いたし候處(中略)

一三奉行申出候嘉瀬村彌市儀氣分不宜親を打殺候儀ニ付昨年十一月入牢被仰付候處段々荒々數同居之者共扱方難渋至極之旨ニ而四尺牢江入置候旨牢奉行申出ニ付(以下略)

安政四年十一月二十六日

「藩日記」第三二一〇

(一) 及び・・印は筆者による。

右の史料から普通の入牢者と同居出来ない特殊な例と思わ

れる。

注(12) 石井良助氏前掲書九五頁

注(13) 「藩日記」第二二一二

注(14) 「藩日記」第二二一五では四十一名である。青森騒動の詳細については『弘前市史』(藩政編)七八六〜七八七頁を参照されたい。

注(15) 「藩日記」第二二一四

注(16)(17) 「同右」第三一五九。拙稿「安永期の津輕藩刑法についての一考察」(「国史学」第九十七号)で寛政四年の體孝院の一周忌法要では出牢者が一六九名であると述べておいたが、「出牢井居村徘徊御免之數」とあるから全て入牢者ではなく村預等も含まれておったと思われる。この機会に訂正しておきたい。

注(18) 石井良助氏前掲書一一九頁

#### 四 牢屋の役人

幕府では町奉行支配に牢屋奉行があり牢屋敷のことを一さい管理する。その下に牢屋同心と牢屋下男<sup>(しもおとこ)</sup>および牢屋医師がいる。同心はその勤務によつて鍵役<sup>(かぎやく)</sup>・數役<sup>(かずやく)</sup>・打役<sup>(うちやく)</sup>・小頭<sup>(こがしら)</sup>・世話役・書役・賄役・物書所詰・平番・勘定役・牢番等に分かれ、下男は同心の下で雑用をする役であり、医師は本道(内科)と外科担当に分かれている。これらが牢屋固有の役人の主なものである。<sup>(1)</sup>その外に牢内の各室の囚人は形式的に自治的な組織が許されていた。<sup>(2)</sup>

津輕藩でも牢屋の役人は町奉行の支配下にあった附屬吏で牢奉行・

牢守・牢屋番人が見られる。牢奉行は定員三名で役高は俵子四十俵二人扶持であり牢屋敷を管理したものである。その下に牢守があつて定員二名で役高は二十俵二人扶持であり牢屋番人を監督したものである。牢屋番人は定員十三名で牢屋の番人をし、又雑用等にも従事したものであろうか。その外に町医が入牢者（揚屋入りの者も含む）<sup>(3)</sup>に対し病気の診察等を行っている。この程度しかわからず、入牢の者達に自治組織のようなものを認めていたかどうか史料上の制約もあつて不明である。

注(1) 笹間良彦氏前掲書 二〇六―二一〇頁

石井良助氏前掲書 一〇五―一〇七頁

注(2) 石井良助氏前掲書 一二〇頁

注(3) 工藤他山『津輕藩官制・職制』（弘前市立図書館・国立史料館蔵）これは明治になってから書かれたものであり、藩政中期と後期では人数等に異同があつたと思われる。まとまつたものとしてはこれ以外にない。

## 五 牢屋と揚屋

牢屋が如何に管理されていたかおよその様子が元禄十年（一六九七）六月の記録に次のように見えるので少し長いが全文を引用する。

「 覺

一 牢屋之番人四人宛ニ而少茂無懈怠相動可申不限晝夜牢之内外錠前或ハ棚其外所々に心を付切々見舞可申候附番所之燈たばこ火随

分火之元少茂忽諸に仕間敷事

一 牢屋掃除五日に一度宛可仕事

附牢之内天井柱格子四方之板并敷板雪隠等迄朝晩二度宛無残所心を付見可申事

一 牢鍵之事牢奉行方江預置牢舎之者出入之節ハ牢守ニ相渡尤牢奉行立合出入可為致事

一 牢屋江朝夕之食物之外火道具金物之類不寄何品ニ堅不可入候衣類其外不入して不叶物有之候ハハ可任差圖事

一 夜ニ入候而牢屋出入堅為仕間敷事若此方より差圖にて出入仕儀有之候ハハ挑燈可用候カ尤燈に心を付念を入可申事

一 牢江入候者有之節者町奉行斷次第入可申候尤其者之名村所委細書留置可申事

一 不限晝夜牢屋近所江不寄何者不可為立寄候若立止者有之候ハハ早速とかめ可申候怪敷者候ハハ押置及異議ニ候ハハ搦捕早々注進可仕事

一 入牢の者有之節者牢奉行牢守牢番人者不及申博勞町之者共罷出牢江入候者之衣類之内下帯髪之内迄悉穿鑿仕牢江入可申候相定候通牢奉行牢守立合牢之戸江念を入錠おろし可申事

一 牢食之事牢守方ニ而焚出し牢舎之者ニ番人喰せ可申候食物之内ニ何ニ而茂疑敷物入候哉与能々念を入改可申事

一 牢舎之者扶持米之儀在々之者ハ其者之村より賄すへし町より牢舎之者有之ハ其町より扶持可仕地他國壹人者ハ町米喰せ可申候尤牢賄請拂之儀別紙書付之通相違無之様可仕事

一 牢を借り候而入牢之者有之は借り候者の方より扶持仕候間喰物持  
参候ハハ番人請取相定之通相改喰せ可申事

一 牢舎之者病氣其外牢死有之ハ早々町奉行迄可申達事

一 牢舎之者病氣ニ而醫者に見せ候節者醫者脇差を番所ニ差置病人  
牢屋之内より手を出させ脈取せ可申候若病氣之品ニ寄左様に難成者  
ハ相伺可任差圖事

一 牢より出し申者ハ町奉行差紙無之して堅出し申間敷事

一 拷問之者有之節毛頭依怙最眞為仕間敷事

一 牢舎之者死罪之時ハ相定之通無相違様に可相守尤其罪人輕重多  
少ニ寄至其時差圖次第可相勤事

一 万 一 牢屋構之内或者牢屋近所より出火之節者町奉行判形之札を持  
町之者かけ集可申候間其札壹枚ニ牢舎之者壹人宛繩下或ハ羽かへ  
付ニいたし相渡餘り人有之は右之通ニ仕博旁町之者ニ繩取申付牢  
奉行并牢守附添退場を見合引取可申候火鎖候ハハ早速入牢申付其  
旨可申達事

右ヶ條之通堅可相守者也

元禄十 丑丁年六月

一 (1)

右によれば、嚴重な牢屋番人の牢内見廻り、牢屋の清掃は五日毎に  
行、牢奉行が牢屋の鍵を管理し牢守の鍵の開閉には立ち會ひ、牢屋  
へ食事その他の差し入れ及び入牢者に食べさせる扶持米の出し方等に  
ついて、牢屋の出入り特に夜の出入りの嚴重さ、昼夜に限らず牢屋附  
近をうろつく者の処置、入牢者の病氣や死亡に際して医者の処置、拷  
問は依怙最眞して行つてはならない事、牢屋及び牢屋附近の火災に於

ける入牢者の取り扱い方等具体的に規定されている。

しかし牢屋の管理は必ずしも順調に行われなかったと思われる(2)。

元禄十年よりはかなり後になるが寛政九年(一七九七)八月十日の記  
録によると、牢内へ持ち込み禁止の品物を定めても(具体的品名は不  
明)牢守や牢屋番人等の取り扱い方如何によつてきまりが守られない  
ために禁止品を使つて牢破りがたびたびあった。そこで牢屋敷内に昼  
夜とも牢奉行四人が勤務し牢屋の掃除を不意に行ひ、その際に入牢者  
を裸にして別の牢に移し町同心と牢奉行の立会いのもとに牢守が裸で  
牢内を清掃すれば検閲が徹底的に行われる事になり禁止の品物が隠さ  
れている事も無くなるであらうといふのである(3)。

牢破りについては津輕藩の刑法「寛政律」(寛政九年三月制定)の  
「八九科人出牢」に二カ条が初めて規定されているのが見える(4)。

「文化律」(文化七年三月に「寛政律」改訂増補し完成したもの)  
の「一三九、囚人出奔致サセ候者御仕置ノ事」には二カ条とその補足  
説明が見られる(5)。他藩の例では盛岡藩の「盛岡藩律」(文化六年制定)  
に「八十一、牢拔手鎖外シ御構之地江立歸候者御仕置之事」とあり十  
二カ条及び十四の例が見え詳細な規定である(6)。いずれも「御定書」  
(幕府法)の強い影響を受けているものであり、牢破りの防止対策を  
意味すると同時に牢屋の管理が次第に整備されて来た事を示すもので  
あらう。

牢内の囚禁具としては文政八年六月二十一日に、  
「一 牢奉行申出候右春庵足鉄懸置候様被仰付候間昨日より足鉄懸置  
申候尤手鉄之儀者被仰付無御座候間懸置不申旨申出達之」(7)

と見える。足鉄は錠<sup>はた</sup>(足枷)、手鉄は手鎖の事と思われるが構造まではわからない。勿論、縄もあったと思われるので幕府の囚禁具である手鎖、錠、牢内縄の三種類に準ずるものと見てよいのではないか。しかし全ての入牢者が囚禁具をつけていたものでもないであらう。

次に入牢者の衣食について述べる。元禄十六年十月十四日に

「一 牢奉行葛西久兵衛書付ニ而申立候者牢舎之者貳拾人衣類散々破薄ク御座候衣類壹ツ茂可被下置哉之旨申立候付則主水江相達右綿入壹ツ宛相渡候様ニと被申候付右綿入壹ツ宛買上ケ相渡候様ニと勘定奉行江申遣之」  
L (8)

とある。衣類の支給規則があつたのであらうが、右の断片的史料からでは実態はつかめないとしても破れて薄くなりかなりひどい様子であつた事が想像出来る。食事は一日の回数や分量に牢の種類、男女別等によつて少しは差があつたであらう。回数は揚屋が一日に二回とあるのと同じと思われるが、分量だけは「牢舎之者とも飯料之儀者一日壹人ニ付四合五夕雑用錢之儀者夏冬共ニ貳分宛渡來罷有候<sup>(9)</sup>」と見えるので標準がわかる。幕府では平囚人で四合五勺であるから大体同じと見てよい<sup>(10)</sup>。しかし、天明・天保の大飢饉による食料事情の悪化は入牢者にも深刻な影響を与えたようである。

天明三年(一七八三)十月五日に、

「(以上略)此度牢舎之者並合ニ泰道儀も片飯壹合粥ニ被仰候ハハ其段可申通与奉存旨申出之主膳江達之牢賄之儀一統片飯一合三夕積申付候泰道儀も右之通賄申付旨申遣立」<sup>(11)</sup>

右に見える「片飯」は「片食<sup>かたけ</sup>」と同じであると解釈すれば、一日二

食のうち片一方を意味するものと思われる。天明の大飢饉の窮状からすれば、一日に粥一合三夕だけ給したと考える事が出来る。

天明三年の末から翌年に亘り牢死が増加しているのは牢内の環境の悪さもあるが主として右の事情によるのである<sup>(12)</sup>。

天保九年(一八三八)六月二十九日に、

「(以上略)牢舎之者とも飯料之儀者一日壹人ニ付四合五夕雑用錢之儀者夏冬共ニ貳分宛渡來罷有候(中略)牢舎之者とも儀者壹人に付一日三合八夕雑用錢之儀者夏冬とも壹分五厘宛渡方可被仰付哉之儀申出之通申付之」  
L (13)

とあつて四合五夕が三合八夕に削減されている。天保十年(一八三九)三月四日には、

「(以上略)一日壹人ニ付貳合五夕雑用錢之儀者夏冬共壹分五厘宛渡方可被仰付哉之儀申出之通申付之」  
L (14)

と見えるが、三合八夕から更に二合五夕に減らされているわけである。

天保十一年(一八四〇)六月十八日に、

「一 町奉行申出候牢舎揚屋入之者共飯料并雑用錢増渡被仰付度旨申出候得とも此節御米金御配御六ヶ敷御場合ニ付難被仰付奉存候得共段々申出罪人與者乍申不得止事相聞候間牢舎之者是迄一日壹人ニ付貳合五夕之処五夕増三合揚屋入之者是迄一日壹人ニ付三合之処五夕増三合五夕宛被仰付候様雑用増錢渡之儀者難被仰付候様附紙之通申付之」  
L (15)

とあつて、五夕増えて三合になつてゐる。天保の大飢饉では天明期のそれに比較して藩内の餓死者が少なかったのは、信明<sup>のよはる</sup>(第八代藩主)



以来備荒貯蓄の制度が備わつたのと、その救済策のよろしきを得たためであつた<sup>(10)</sup>。従つて牢死者は「藩日記」にかなり散見されるもの（食料だけでなく環境の悪さによる）、牢屋の食料事情が天明年間と比較してかなりよくなつてゐるわけである。

揚屋はすでに述べた通り、軽い容疑で長期間町預りや村預りにすると町や村の重い負担となるので、それを軽減するために文化二年十月に初めて設置されたものであつた。

揚屋の内部構造や管理の様子がどのようなものであつたかは牢屋よりも更に知り得る史料が少ないのである。

文化二年三月二十五日に次のように見える。

「(以上略)」

一 揚屋間敷井住居取之儀者先頃略圖之通同相濟候ニ付明り取スカシ格子之義者引垂木位之木品相用候様其外手水處共御締合ニ相成候様御取建被仰付候様

一 先頃略圖之通同相濟候番人詰所之義詮議之役人相詰候場所相兼候ニ付縁無シ疊敷方被仰付候様御詮議之者罷有候間内井人足相詰罷有候勝手共茶羽延敷方被仰付候様尤御詮議之者に寄茶羽延ニ難差置者者薄縁又者菅差附延敷方之儀者時々私共ニ而差略可仕奉存候

一 御詮議之者有之右揚屋ニ被差置候節番人町同心貳人宛晝夜四人不寝之番致候様外ニ町人足貳人宛是又前書同様相詰候様被仰付候様

一 右揚屋惣見繼方平日馬喰町月行事引擔被仰付候様猶又御詮議之

者賄方之義者壹賄五拾文位之積を以汁漬物ニ而一日貳食宛ニ被仰付右焚出之義者は迄馬喰町月行事より仕出賄ニ被仰付候様

一 揚屋ニ被差置候者共賄錢之義者他領者之分者上より渡方被仰付町在九浦之分者其度々立替渡被仰付壹年惣調之處ニ而向々より取立上納被仰付候様左候ハハ賄錢渡方之義者大勢之節者五日切少勢之節者十日切と歟渡方被仰付候様尤賄錢手形馬喰町月行事預置町同心引取候様被仰付候様

一 揚屋内之入口御締合之儀御詮議之者出入有之節井食事等之節斗開キ置其餘者晝夜ノ切置候様尤湯水等之義者スカシ窓より人足差出候様被仰付候様 (以下略)

右の史料から揚屋の内部構造を推測し得るものとして、明り取りをつける、スカシ格子には引垂木ぐらゐの木を使用する、便所は脱走出来ないよう厳重に作る、番人の詰所に敷く畳や筵の種類等の事についてである。

管理は番人二人と町同心二人が昼夜の不寝番をし更に町人足二人が揚屋に詰める、揚屋入の者に対する食事は汁と漬物で一日に二食とし馬喰町の月行事が仕出賄いを担当する、揚屋内の入口は御詮議の者の出入りがある時や食事の差入れ以外は昼夜共に閉めておき湯水などはスカシ窓から人足が差し出すのである。牢屋の管理と同様にかなり厳重であつたと思われる。

食事の分量と雑用錢は文化八年(一八一二)の例では、一日に白米五合とそのほかに雑用錢七分七厘五毛である<sup>(11)</sup>。幕府と比較して米は同程度としても雑用錢は幕府の十五文に対してかなり高いようである<sup>(12)</sup>。

藩内の牢屋との比較では、天保九年六月二十九日によれば、牢屋の米四合五夕を三合八夕に雑用钱夏冬二分を一分五厘に減らしているのに対し、揚屋では米六合五夕を四合に雑用钱夏五分五厘を三分に冬六分五厘を四分にしている<sup>20</sup>。

天保十年三月四日によれば、牢屋の三合八夕が二合五夕に夏冬の一  
分五厘は変らないのに対し、揚屋の四合が三合に夏三分冬四分が夏冬  
共に二分となっている<sup>21</sup>。

天保十一年六月十八日によれば、前年の分量より少し増して牢屋の  
二合五夕が三合に揚屋の三合が三合五夕となり雑用钱は牢屋揚屋共そ  
れぞれ前年と変っていない<sup>22</sup>。

右に述べた事から天保の大飢饉に際して牢屋と揚屋の待遇悪化の様  
子がわかる。このような非常事態の時でも牢屋より揚屋の待遇が若干  
よいのだから平常の年では揚屋が牢屋よりも条件が多少よかつた事は  
当然であり容疑の軽重による差であろうと思われる。

次に揚屋入りについて入牢との関連を通じて揚屋の機能を考察して  
見る。揚屋の設置理由は前述の通りで、一言で云うならば容疑の軽い  
者を収容する所であつた。しかし、どの程度の容疑や犯罪で入牢にな  
るのか、又は揚屋入りになるのか「藩日記」に見える判例の分析から  
明確な基準を決める事は困難である。

まだ揚屋のない文化二年以前では、町預りや村預り等の者以外はす  
べて牢屋に収容され、その主たる対象は町人と農民でありそのほか下  
級武士も含まれていた事が「藩日記」に見られる多数の判例から言い  
得る。

文化七年（一八一〇）一月十八日によれば、

「一（以上略）御目見以下之分者當人及白狀不申候而茂疑敷相聞得  
候分者兼而揚り屋入之上御詮議方被仰付罷有候得共御目見以上之  
族者當人及白狀不申内者揚屋入之上御詮議申上候先例無御座候然  
處御目見以上之族ニ而茂私共ニ而口聞詮議之上及白狀候節者其罪  
科ニ寄直ニ揚屋入不被仰付候而者出奔之程難斗尚又宿元江相返候  
而者如何様之取巧仕候哉難斗族茂可有御座哉ニ奉存候随而以來御  
目見以上之族ニ而茂罪科有之私共ニ而口聞詮議之節及白狀候分者  
其族ニ寄私共ニ而直ニ揚屋入申付其旨御達申上候様被仰付候様  
（以下略）」<sup>23</sup>

と見える。これは御目見以下の武士は白狀しなくても疑わしい場合は  
揚屋入りで、御目見以上の武士で白狀しなければ揚屋入りさせないが  
白狀した時は其の犯罪の内容と人物によつて揚屋入りにしたいという  
四奉行の申出である。従つて武士の揚屋入りは身分によつて差異があ  
るわけである。

かくて下級武士は「揚屋（入り）之内」と記され農民・町人を対象  
とする「寛政律」「文化律」の規定が適用されている判例が「藩日記」  
に散見するのではつきりするが、上級武士は揚屋へ収容しなかつたの  
ではないかと思われる。それは切腹・閉門・蟄居・御預け・役下げ・  
御暇といった刑罰が適用されているのが見られるからである。

文政十三年（一八三〇）三月十三日に、

「一 牢奉行申出候牢舎之者とも此節大勢ニ相成居所無御座昨日他領  
者三人御引上入牢被仰付候處右之者共女牢江入置候に付女牢壹間

相塞り外人數貳ヶ牢<sup>ニ</sup>振分ヶ入候處此上入牢之者被仰付候而茂居所無御座候間此末御引上ヶ之もの等御座候者揚屋入<sup>ニ</sup>而茂可被仰付哉之儀伺之通申付之」<sup>24)</sup>とある。

右の史料から牢屋が満員であるから入牢させるべき他領の者を女牢の一部に収容する。更にこれ以上入牢者が増加すれば揚屋に入れないというのである。これはあくまで臨時の緊急処置とは思ふが牢屋と揚屋の混同した使用がうかがえる。

御留守居支配である今栄六の姉が狂ったので揚屋へ収容してはしいという申出が出された。しかし、「(以上略)是迄女子不行状之故を以申立揚屋入被仰付候御例無御座候間難被仰付旨被仰付候(以下略)」<sup>25)</sup>のように武士の女は前例がないといって却下されているのが天保十三年(一八四二)九月七日に見える。

米の不正をした小橋村の三人中男二人は揚屋入りで、の<sup>よ</sup>という女については、「(以上略)女之儀者死罪姦罪之外揚屋入不相成旨<sup>ニ</sup>付女之よ儀者別紙之通年寄在方<sup>ニ</sup>預置(以下略)」<sup>26)</sup>と安政四年(一八五七)八月二十八日にある。右によれば女の軽い犯罪は村預りで処理するようである。

右の二つの史料から、武士の女は揚屋には収容せず、農民や町人の女で犯罪の軽い者は村預りや町預りによつて処理したようである。これだけをもって女の揚屋入りについて一般化し得ると断定しかねるが、歴代藩主の法要等に際して大赦を実施しても牢屋及び揚屋へ収容する人数が次第に増加し、時には男を収容するために女牢を利用してはいるくらいであるから犯罪件数と人数は男が圧倒的に多いのであり、脱走

等の危険も少ない女は町預りや村預り等にして揚屋に収容するのは非常に少なかったのではなからうか。

牢屋や揚屋は一般社会から隔離された世界で環境の悪さに加え満員になると条件が更に悪化し牢死が増えたりする。従つて人々が好んで入る事を望むところでないのは勿論である。次の史料は天保十年(一八三九)三月十二日のものであるが、

「一御元締勘定奉行申出候揚屋入之者并是迄飯料并雑用錢其外諸品御立替渡被仰付右之分在町より年々上納可相成分近年違作<sup>ニ</sup>随無地上納無之御立替渡而已相成居申候然者當時究民之者共取續難相成處より求而悪巧等<sup>ニ</sup>至揚屋入御養預候様子粗相聞得右故哉此節揚屋入之者大勢相成最早居所茂無之趣相聞得申候猶又御米錢御賦必至与御差支御家中渡茂御行届難被為成御場合<sup>ニ</sup>付此上御立替渡難相成奉存候依之在者在方町者町方<sup>ニ</sup>御預被仰付候様左候者自然御締茂相立可申与奉存候間右之趣夫々被仰付候申出通申付之」<sup>27)</sup>とある。

右によれば、揚屋入りの者が増加して満員となり収容しきれないので村や町でそれぞれ預かるようにしたいといふのである。揚屋は牢屋よりも前述したように待遇が少しよいので飢饉のためにシャバで生活に喘いで死亡するよりは揚屋入りになる程度の悪い行為をして揚屋へ収容されると最低限度の生活が保障されるわけである。病氣等で死亡する危険もあるが、シャバで餓死するより揚屋入りを望んだのである。これは町人や農民の中でも生活力の弱い者達の窮余の一策であつたと思われるのである。

最後に揚屋へ収容されている期間にふれておく。「藩日記」に記載されている揚屋入りの者達の判例ではいつ入ったのか明記されていないが、歴代藩主の法要等に際して大赦を実施する為の取調書には年代のわかるものもある。例えば天保十四年（一八四三）七月五日では、<sup>(28)</sup>「天保十三年（去寅年揚屋入）」とか「當五月揚屋入」と名前の上に記されている。嘉永六年（一八五三）十二月十三日には揚屋入りの者が四十三名数えられる。<sup>(29)</sup>その中には天保十年（一八三九）から十四年間も入っている者もあるが嘉永五年（一八五二）からの者が非常に多い。従って揚屋の収容期間は一年以内が普通であったように思われる。

注(1) 「御用格」（寛政本。第十三「牢屋」）。「藩日記」には見えない。

注(2) 二・三例をあげれば牢破りの為寛保四年正月二十一日（同右の御用格）に、牢奉行以下の役人が罰せられ百十一日目で「愼」が許されている。

天明二年八月三日（「藩日記」第二二〇一）に、牢破りがあつたのは牢屋の役人の勤務の怠惰にあるとして、牢奉行以下の役人の判例がある。

寛政九年八月十一日（「藩日記」第二四〇〇）にも牢守以下の判例がある。

注(3) 「藩日記」第二四〇〇

注(4) 蝦名庸一氏「弘前藩御刑法牒（寛政律）」（「弘前大学国史研究」第十五・十六合併号所収）によって紹介されたものによる。

注(5) 弘前市立図書館蔵「青森県刑法・警察史（文化律）」

これは青森県警察史史料編集委員中村元吉氏によって史料として復刻（ガリ版刷り）されたものである。

注(6) 「盛岡藩律」全（京都大学法学部編『近世藩法資料集成第一巻所収』）

注(7) 「藩日記」第二七五三 文政八年六月二十一日。（一）と印は筆者による。

注(8) 「同右」第五二三 元禄十六年十月十四日。（一）は筆者による。

注(9) 「同右」第二九六五 天保九年六月二十九日

注(10) 石井良助氏前掲書一三二頁。石井良助氏『江戸町方の制度』五八頁。

注(11) 「藩日記」第二二一五

注(12) 拙稿「安永期の津輕藩刑法についての一考察」（「国史学」第九七号所収）

注(13) 「藩日記」第二九六五

注(14) 「同右」第二九七六

注(15) 「同右」第二九九三

注(16) 『弘前市史』藩政編七七頁

注(17) 「藩日記」第二四八一

注(18) 「同右」第二五六六 文化八年五月一日

注(19) 石井良助氏『江戸の刑罰』一三二頁

注(20) 注(13)参照の事。省略した部分に見える。

注(21) 注(14)参照の事。省略した部分を含む。

注(22) 注(15)参照の事。

注(23) 「藩日記」第二五四七

注(24) 「同右」第二八一六

注(25) 「同右」第三〇二二

注(26) 「同右」第三〇二七

注(27) 「同右」第二九七六

注(28) 「同右」第三〇三二 ( ) は筆者による。

注(29) 三、種類と収容人員の項 注(17)参照。「藩日記」第三一五

九。

## 五 刑罰としての入牢

牢屋と揚屋は以上述べたように主として未決囚を拘禁するところであるが、同時に牢屋は判決後に服役させる場所でもあった。そこで刑罰としての入牢について若干ふれておきたいと思う。

永牢と徒刑に代る牢居の二種類がある。最初に永牢の例をいくつか指摘して見る。

寛政二年(一七九〇)六月二十九日<sup>(1)</sup>に、湊村の与助が幼年で母の巡礼に従い母が途中で死亡したので孤児となり他領で悪事を働いた。帰藩してもその日暮らしの伯父には保護してもらえず、悪い仲間に入るのを防ぐため永牢になったと見える。享和三年(一八〇三)十二月六日には、赤石組館村の久七が同年八月に馬を盗んで他領へ売り払い斬罪に処せられるところを永牢となっている。弘化四年(一八四七)十

二月四日<sup>(3)</sup>に、他領者の源次郎が二百六十兩と衣類を盗んで斬罪となるべきところを永牢に処せられている例がある。

町人の例では、三国屋喜右衛門が過分の銭を引負い藩への年賦上納が遅れその上大坂の銀主から借金をしたために家財没収・永牢となつたのが文化元年(一八〇四)四月十三日に見える。<sup>(4)</sup>

武士階級かと思われるものでは文化十四年(一八一七)十月十三日によれば、<sup>(5)</sup>文化十二年に強盗を働いた一味が主犯の和田太左衛門の牢死で判決が少し軽くなり永牢となった。やがて天保三年(一八三二)になって仲間では弱年であった百川寛平は文化十二年から数えて入牢期間が十八年にもなったので出牢を許されている。<sup>(6)</sup>

「藩日記」には牢死がかなり散見される事や大赦の実施が相当数見えるので、「永牢」といっても牢屋の収容能力から考えて、いわゆる無期懲役となった者は少なかったのではないかと思われる。

次に徒刑に代る牢居の例をあげて見る。徒刑は懲役刑であつて死罪につぐ重罪であつた。三〇歳の上、徒半年・一年・一年半と三段階に分かれている。取上の刑場で蔽が行われてから銅鉦山へ流され、年限の通り労役に従事したのである。しかし文化八年(一八一二)、徒刑は銅鉦山の苦役に代り、牢居を命ずることとなった。すなわち、徒半年は牢居百日、一年は牢居二百日、一年半は三百日、二年は五百日である。<sup>(7)</sup>

弘化四年(一八四七)十二月二十一日によれば、<sup>(8)</sup>大罫組久吉村の庄屋を勤める長六が許可された以上に相当数の木を伐り横領したので、三百日の牢居後に鞭刑三十鞭・十里四方追放・大場御構となつて<sup>(9)</sup>いる。

(板柳)  
板屋野木村の弥之が同じ村の代助から金子二・三十兩を取ろうとし

て強迫状を庄屋迄送った事が見つかり、安政四年(一八五七)十二月二十日によれば、牢居五百日と申し渡された。牢居の期限が切れて安政六年(一八五九)六月十三日の判例で鞭刑三十鞭・十里四方追放・大場御構となつてゐるのが見える。<sup>(1)</sup>

最後に入牢の期間についてである。「藩日記」の中に歴代藩主の法要等に際して大赦を実施する為の取調書があり年代のわかるものもある。しかし、これまで見て来たように未決囚の拘禁としての入牢と刑罰としての入牢と二種類存在するので「藩日記」からは両者の入牢期間に区別し難いのである。ただし一年未満から二十年以上に及ぶかなりの幅がある事だけ言い得ると思われる。

注(1) 「藩日記」第二二九九

注(2) 「同右」第二四六五。弘前市立図書館蔵『御刑法書之写』

には詳細に見えている。

尚「寛政律」の規定では斬罪である。(第九十九条)

注(3) 「藩日記」第三〇七五

尚「文化律」の「六三、盗賊御仕置之事」では斬罪である。

注(4) 「藩日記」第二四六八

注(5) 「同 右」第二六五三

注(6) 「同 右」第二八四六

注(7) 『弘前市史』藩政編二八六頁。「藩日記」第二五七二文

化八年十一月七日。

注(8) 「藩日記」第三〇八七。「文化律」の「六三」「六五」の

適用である。

注(9) 拙稿前掲論文参照

注(10) 「藩日記」第三二二一

注(11) 「同 右」第三二二九

## 六 む す び

以上述べたことを簡単にまとめて見る。まず牢屋の所在地はおそくとも慶安二年頃になると城下の北端にある馬喰町に定められていたことが知られる。

牢屋の管理は町奉行の下にある牢奉行、牢守、牢屋番人によつてなされ、町医が入牢者及び揚屋入りの者達の健康管理にたずさわつていたわけである。

牢屋の種類は大別すると大牢、中牢、女牢であり、文化二年には揚屋が設置されている。

収容人員は大牢・中牢が三十名程度、揚屋は四十名程度だとすれば、多くても百名を少し越す程度であらうと思われる。

牢屋の構造や管理の実態については不明な点が多く究明し難いのであるが、元禄十年の管理規定などによつて牢屋内及び周囲の嚴重な規制の様子が推察される。牢屋の環境の悪さは牢死が「藩日記」に散見されるので想像出来るが、飢饉による食料事情の悪化が牢屋にも反映している事が知られる。又、いかに厳しく規制しても牢屋番人等の取り扱い方によつてそれが守られず牢破りがあったことが知られ「寛政律」「文化律」にその対策としての規定が見られるわけである。収容

される対象は主に町民や農民であるが下級武士も含まれているのである。

揚屋については文化二年の規定から構造と管理の様子を或る程度知る事が出来るが牢屋と同様にかなり嚴重なものであつたと思われる。

牢屋よりも一般に軽い容疑者や犯罪者を収容したもので、待遇も牢屋と比較して多少良く、揚屋が設置されてからは武士階級が多く収容されたものと思われる。収容の期間は一年以内が多かつたようである。

右に述べたように牢屋は未決囚を拘禁するところであるが、服役させる働きも持ち合わせていたのであり、永牢と牢居の二種類がある。永牢といつても大赦等によつて許されておりいわゆる無期懲役は少なかつたと思われる。牢居は最高五百日である。

以上、津輕藩の牢屋について大雑把にその概要を述べたのであるが、刑罰法としての「寛政律」「文化律」が幕府法の影響を受けている事でもあり、牢屋についても幕府の牢屋を基準にして津輕藩なりの小規模なものを作つたのではないかと思われるのである。